

ガーナでそろばんプロジェクト 91 号(2021年3月13日)

★★ 誰一人 取り残さない授業をめざして★★

学校が再開となつて間もなく2か月が経とうとしています。再開になってから、そろばんの導入を目的とした授業を4年生と5年生のクラスでおこなっています。その5年生のクラスには、かつてお兄ちゃんのコンスタンス、パトリックに連れられて来たいたアントニーがいます。アントニーは、私の事をこの二人に話したようで、二人ともそろばん教室の再開を望んでいるようでした。コンスタンスもパトリックもそろばん教室に通い始めたのは中学生になってからでした。二人ともそろばんで乗算除算が出来るまでになりましたが、それまでは九九もつる覚えの状態でした。現在二人とも高校生になっているので、再開したとしても毎回頭えることは少ないと思いますがそろばんの学びを続けていたいという思いはとてもうれしいことです。

さて、子どもたちに数の仕組みを理解してもらうために数カードを使った授業はボキボキ容易く折れるチョークを使うことなく、また手が直ぐに真っ黒になる黒板に書くことなく、ただガムテープの消費は半端ないけれど、それでも黒板の貼られた数カードで、子どもたちの考える力が深まると確信しておこなっている授業です。この数カードを使い始めて間もない頃、4年生の教室であることが起きました。近い数を作ろうと出題をした時、他の子どもは黒板に貼られた数カードを見て考えているのに一人だけ手を挙げた生徒がいました。前に出てきてその数を作るように言うと、生徒の一人が「その子は中学生だよ。」と教えてくれたのです。自習時間の中学生がまぎれて授業を受けていたのです。以前より自習クラスの生徒が私の時間帯の工作の授業に教室に入ってくる事への腹ただしさから感情的になりその生徒を教室から出し、本来のクラスである4年生に「中学生なんだから、レベルが違う。」と言ってしまいました。これは後になって猛烈に反省したことなのですが、このあと私は授業をしませんでした。

子どもたちが楽しみにしていた算数の時間を奪ってしまったのです。また「レベルが違う」と言ってしまったけれど、私がここでそろばんを教えようと思ったきっかけになったのも中学生が要因でもありません。活動し始めた当初、棒を書いて計算している中学生、それを私に見られて恥ずかしそうに隠したのです。初めてそろばんを学校に持って行き、そろばんを数をかぞえた時、別の中学生の男子は「十がわかった。十がわかったんだよ。」とそろばんの珠を十の位に置いた時にそう言ったのです。今でもこの時の生徒のうれしそうなお顔は覚えています。『誰一人取り残さない』この2か月近くの間には様々な悩みが生じました。4年生では手を挙げて私を指してアピールの強い子ども達の陰に理解できていない子がそのまま何も考えるでもなくぎゅうぎゅう詰めの机に居る状態。5年生では問題を理解していなくても手をノリノリで挙げてくる生徒も居る。またその陰で理解できていない子がそのまま何を考えるのかわからないでいる状態です。そろばんに早く触れてもらいたいと思いつつも、誰一人取り残さない授業の実践を目指していきます。また4年生5年生の担任も授業を現地語でサポートしてくれています。これは、私の『若い先生を育てる』という目標にも繋がっていてとても嬉しく思います。継続して一緒に授業をおこなっていききたいです。

報告 TOSHIOKO



協賛 トモエそろばん様